

外国語教育メディア学会（LE T）関西支部中学高校授業研究部会・
京都教育大学英語の教え方研究会 主催

2019年度 4月例会のご案内

日 時： 2019年 4月14日（日）13：30～17：00

会 場： 京都教育大学 CALL教室（1号館B棟4階）
（アクセスは<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>から）

参加費： LE T会員・・・・・・・・・・・・・・・・・・無 料
京都外国語大学より良い英語教育を考える会会員・・・・300円
学生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・200円
一般・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・500円

問い合わせ先： 西本有逸（京都教育大学） yuitsu@kyokyo-u.ac.jp
鈴木寿一（桃山学院教育大学） juichisuzuki0011@gmail.com

13：10～ 受付
13：30 開会（途中、休憩あり）

【話題提供】Voice としてのアウトプット活動を考える

京都教育大学 西本有逸

日本の英語教育実践の伝統の一つに生徒の「自己表現」があります。昨今、あまり使われていないようですが、「自己表現」とは生徒の「声」に他なりません。英語教育界で「音声」はあっても、「声」は議論されてきませんでした。「声とは、身体と人格が交差するところ」（メルロ＝ポンティ）という至言がありますが、「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、生徒の「声（voice）」は必須ではないでしょうか。声（voice）としてのアウトプット活動を考えます。

休憩

主体的なアウトプット活動を活性化するためのフィードバックを通じた指導と評価

～生徒の主体性を育む指導と評価の構造～

滋賀県立長浜北高等学校 坂本美佳

1 研究の目的

本校の生徒は、教員の指示どおり素直に学習活動を行うことができるが、主体的に活動することは苦手な指示されることを待ったり、内容を深く考える作業を伴うような課題からは逃げがちでチャレンジすることを避けたりする傾向がある。また、自分の学習結果を振り返ることもあまりしない。アウトプット活動が重視される現在、本校生をどのようにアウトプット活動に主体的に取り組ませるかを考え、ステップ毎に小目標を積み上げる指導や、生徒自身にミニッツなどで学びを振り返らせ教員がそれにフィードバックをする授業実践を行った。本発表はその指導方略やフィードバックを通じた形成的評価活動の効果について報告する。

2 研究の内容

(1) 設定研究課題の見通し

- ディベートのような高度なアウトプット活動でも、細かく分けたステップを設けて指導を行えば、生徒は学びの見通しを持つことができ、また各ステップで行う活動内容の理解が深まり、それによって「～できそう」というチャレンジ精神が生まれ、最終的に「～できた」という達成感を持たせることができる。
- 生徒による自己フィードバックや教員が適切なフィードバックを行えば、難しいアウトプット課題でも、生徒の学ぶ意欲を高めるとともに学ぶ方法を生徒は身につけることができる。
- 生徒がゆっくりと自分のペースで考える時間を設定することで、英語が得意でない生徒でも中身のある思考をすることができ、最終的に、根拠ある理由を述べる説得力のある発言をすることができる。

(2) 実践内容

①概要

アウトプット活動を主な授業内容とした本校学校設定科目「Active English I・II・III」で、英語で個人またペアやグループで発表したり議論したりする活動をステップに分けて行い、ミニッツや振り返り活動などのフィードバック活動を取り入れた。学年に応じて1週間～2週間に1回 ALT との協同授業を行い、アウトプット環境を高めた。

②授業で取り入れたアウトプット活動

1年次:レシテーション、Show and Tellスピーチ、オピニオン・スピーチ、プレゼンテーション
2年次:ディベート
3年次:プレゼンテーション、ディスカッション

3 成果と課題

- 指導にフェーズを設定しさらにスモールステップに分けて指導することで、生徒は「～できるのでは」という学びに見通しと安心感を持つことができ、高度なアウトプット活動を一定レベルで完了できた。
- 授業中では質問を控える生徒らがちょっとしたことでも質問したり学びの不安な気持ちをミニッツに書いたりした。回収したミニッツに対しその都度、教員が質問に答えたり、活動に不安を感じている生徒を励ましたりするなど個人的な指導やコメントをするなど直接的な関わりを持った。また、個人の質問を全体にも共有した。それらにより、高度なアウトプット活動への生徒の抵抗感が薄まり、取り組みに消極性は見られなくなった。
- 振り返りシートは、生徒が自分の取り組みを定期的に振り返る機会を与えることになり、次に何をすることが課題なのかを認識させることができた。また、振り返りシートを書くことで自身を肯定的に受け止める生徒も生まれ、「～できた」という達成感が自己肯定感の向上につながったと考えられる。
- 生徒は取り組んでいる課題にゆっくりと時間をかけて向き合うことができたので、ディベートの対戦の中で自分なりの理由や例を挙げて自身の考えを述べることができた。英語教育も即興性が求められる傾向があるが、このように学びに応じてゆっくりとしたペースで考える活動設定が必要であると考えられた。

4 まとめ

英語が苦手な生徒でも、①見通しと考えるゆとり②生徒自身の振り返りや教員からのフィードバック③適切な指導方略と段階別活動資料があれば、アウトプット活動に積極的に取り組ませることができると設定課題に結論を得た。

17:00 閉会